

## 29【P2】Ⅱ-266

江戸期馬医方本草に登場する生薬に関する研究

○白井 一城<sup>1</sup>，市口 幸治<sup>2</sup>，林 俊祐<sup>2</sup>，畠山 有里<sup>3</sup>，乾 真由美<sup>4</sup>，松井 桃子<sup>5</sup>，宮本 如奈<sup>6</sup>，眞銅 智之<sup>7</sup>，畠山 朋子<sup>8</sup>，畠山 光弘<sup>8</sup>（<sup>1</sup>北陸大学 薬学部薬学科，<sup>2</sup>生野高校，<sup>3</sup>四天王寺羽曳が丘高校，<sup>4</sup>東住吉高校，<sup>5</sup>富田林高校，<sup>6</sup>農芸高校，<sup>7</sup>藤井寺工業高校，<sup>8</sup>畠山獣医科）

【緒論及び目的】私達は、江戸時代の動物治療方法に興味を持ち、特に牛の治療書である牛医書なる書写版の治療書を解読すると同時に、その書物の持つ歴史意義を追求し続けている。その過程で、関連の動物治療書を解読し、既にいくつかを報告した。今回、江戸時代の馬の治療目的に作成された馬医方本草という薬品（やくしな）をまとめた書物入手しその解読にあたったので紹介する。この書物は当て字や好き勝手なくずしや作り文字まである漢字とかたなかで表記された版本である。

【方法】甘草、村立、川骨、細辛、防風、芍薬、半夏、丁字、硫黄、独活、二倍子、当帰、陳皮、縮砂、石見川の霜、午膝、水銀の粉、牡蠣、平通散、安息香、兔孫子、茅根、大角豆、しょうが、地黄、龍腦、しその葉、藤瘤、藍土、蓮肉、舟原、射干、忍冬、ねずみの糞等の115の薬品及び、諸病飼汁として鎧将、酒、土水など合計有17項目が書きあらわされている。これらを本研究及び江戸期馬医方本草に登場する生薬に関する研究その2に分けその内容を解読し報告する。

【結論】病の多くが虫という形のあるものにより引き起こされると信じているような時代でも、もっとも薬草類がその効力を発揮するべき時期にそれらを採用し、極力自分たちの身の回りにある植物などを滋養薬として利用するという先人の努力のあとがみてとれると言える。